

インタビュー

大谷仮設歯科診療所のこれからのことを思って

よしざわかし
芳澤 隆 さん



60代 男性 気仙沼市在住

気仙沼市本吉町にて大谷歯科診療所を構え、以来30年地区唯一の歯科医院の院長として地域に尽力。東日本大震災の津波被害により大谷海岸を臨む自宅、診療所ともに流される。震災後引退することも考えていたが、地域住民の要望を受けた県医師会からの要望により同地に設置された仮設歯科診療所の院長に就くことを決心され、現在に至る。

■大谷から大宮へ

—— 前回お話を伺ったのは、2012年の夏でしたね。そのときは、仮設住宅に住んでおられ、大谷仮設歯科診療所で診察されていました。その後、どうされたのですか。

芳澤 2012年の12月に埼玉県大宮市に引っ越しました。2013年7月からは月曜から木曜日までは大谷仮設歯科診療所で仕事をし、夜に大宮に戻ってきています。仮設診療所は、金曜と土曜を知り合いの先生にお願いしています。

—— なぜ大宮に移られることにされたのですか。

芳澤 大谷仮設歯科診療所は仮設ですから、何年続けられるかわかりません。そうなると大谷や本吉で家を建て直すか、ということに意味がないわけです。歳ですし、娘は独立していますし。都内に住むことも一時期考えましたが、ひとつ引っかかることがあったのです。い

いわゆる関東大震災です。心配ですね。みんな東日本大震災を忘れてきていますが、都内で大地震が起きたら、東日本大震災なんてものじゃないですよ。東北の地震は規模が大きく、範囲も広がった。でも住宅は密集していない。

—— 都会は建物や人が多いですし。

芳澤 東北は普段から近所付き合いもあるけども、都会は全然違う。いざとなると、都会の人もお互いに助け合うかもしれないけれども。建物が倒れたら逃げられない。だから都内は止めて、この築13年の中古の一軒家を買ったのです。前の持ち主は、マンションに移りたいとのことですね。ここはちょっと行くと畑はあるし、自衛隊もあるし、川は無い。問題は火事ですね。建物があんまり密集していないからちょうどいいですよ。駅も近くて都内にも出やすく、近所にスーパーがあって買い物もしやすい。非常に便利だよ。

■都会で災害が起きたら

—— 都会で災害が起きると、どのようなことが予想されますか。

芳澤 震災直後は娘のいる古川におり、その後、東京の葛飾区に家を借りて住んでいました。古い家でしたし、付近の道も狭い。近くには川もある。家が倒れれば交通規制する。そうすると車が通れないから、歩いて避難するしかない。これは経験していないとわからないことです。この前、女房が気仙沼に来ていたときに、津波警報がありました。暗くなる前に女房を車で迎えにいった、仙翁寺の前の裏通りの山中を走る農道を通って、気仙沼市内で夕飯食べようかと思ったんですよ。想像だけでも、みんな車で山のほうへ逃げたのだろうね。恐らく、市内のほうも通行止めされていたのだろう。田舎なのに、交通規制で渋滞してまるっきり車が動かない。

—— 田舎でもそのような状況であれば、都会では尚更車での移動は難しいでしょうね。

芳澤 これが都会となると、車で逃げることは無理です。結局、歩くしかない。その時の震度は大きくなかったけれど、いちおう津波警報が出たから行きましようということになりました。アウターライズ地震といって、揺れが大きなくても津波が来ることがあるからね。ついでにご飯も食べに行こうかと安易に考えたのだけどね。そういう訳にいかなかった。ともかく都会に住んでいる人は勇気が必要だよ。

—— 大宮での生活には慣れましたか。

芳澤 やっと少し慣れてきたかね。週の半分は大谷にいたので、まだ大宮はあんまり詳しくないのですが。この辺りは盆栽が有名なのです。盆栽町なんてものもある。すごく立派だね。聞いた話ですと、立派な盆栽だと5000万、もっとすごいと1億円だそうです。歯医者やるより盆栽のほうがいいなって。大谷に家を建てたとき、庭にサツキとツツジをいっぱい植えました。それが津波で全部流されてしまった。老後は盆栽でもやろうかなと思っていたのです。

■大谷仮設歯科診療所のこれから

—— 大谷と大宮を行ったり来たりの生活は大変だと思います。将来的には、完全に大宮に移られることもお考えですか。

芳澤 まあ私も66歳でしょ。大谷での仕事は忙しいというほどでもない。完全に仕事辞めてしまえばそれもいいけども、やはり仮設歯科診療所をつくってもらって、従業員も2人いる。完全に辞めてしまうのは、道義的な部分で気にかかるところはあります。従業員も、1人は自分の家を建てたけれども、もう1人はまだ仮設ですから。辞めてしまうと2人とも収入が無くなるわけです。私自身辞めて毎日大宮の自宅にいてもね。若ければもっとがんばるけどもね。そんなに貯えはないけれど、今はお金だけではないのです。

—— しばらくは大谷での診療を続けられるのですね。

芳澤 少し仕事をセーブしながら続けていこうかと。大谷で金曜、土曜に診ておられる先生も、岩手県の大船渡でもともと開業されていまして。それが津波で流されて、やむなく廃業されて。その先生もちょっと病気があるのですよ。もう一度病院を建て直して、というのは厳しいところがあるし。こっちに来てもらって、一日半ぐらいがちょうどよい、と考えておられるのじゃないかな。

—— 本来であれば引退されていてもおかしくないお歳ですね。診療所管理者の後任についてはどうお考えですか。

芳澤 昔に比べれば、医者も歯医者も少しずつ増えてきたけれどもね。田舎で開業医としてやっていくことの最大のネックは、子どもの教育なのです。若い人に来てもらっても最初はよいけれど、子どもができると問題が出てきますから。自分の跡を継いでほしい、という希望があっても田舎での教育はちょっと無理です。うちも娘たちを仙台に住ませ、高校に通わせました。それで当時から私は単身赴任でした。特に医者はまだ全然足りない。震災のおかげで、本吉病院の院長たちみたいに、単身赴任してでもやってくれる人もいるけれども、それも熱意が無ければ、うまくはいかないでしょう。本吉と気仙沼が合併して、気仙沼公立病院の分院になっているから、院長の負担も減っていいのだけれど。

—— 宮城県沿岸部の他の仮設歯科診療所の状況はどうなっているのでしょうか。

芳澤 宮城県は、震災後に5つの仮設歯科診療所をつくりました。うちひとつは患者さんがいないから廃院しました。場所の選定が悪かったのでしょうか。もうひとつは、町の建物を借りて、それを仮設歯科診療所にしました。あとの3つは歌津、大谷、志津川の仮設歯科診療所です。

—— 診療所の経営はどうですか。

芳澤 医療費免除と従業員の給料補助は、今年（平成25年）3月で終わりました。岩手県も福島県も、患者の医療費免除は続いているけれども、宮城県だけ3月で終わってしまった。震災後、仮設歯科診療所ができて、ほかの開業医の先生も一生懸命仕事して、患者さんもいっぱい来て、ひととおり直しているわけです。でもだんだん患者さんが減っている。だから

経営も苦しくなってくる。いろんな問題が背景にあるわけだけど。そもそも人口が減っている。それから仕事をする人も増えてもきた。交通も不便ですからね。そもそも大谷地区というのは特殊なのです。人口は3,000人いるけれど、若い人は日中気仙沼に仕事に行っている。漁業をやっている人は、日中海に出ている。本来人口3,000人であれば、歯医者一軒はやっていけるはずなのですけれどね。知っているだけでも、何軒か気仙沼近辺の市町村に家を借りたり、買ったりしている人がいます。大谷地区は仕事場が無いところなのですね。何軒か工場があるけども、規模は小さい。よくあんなところで30余年、自分でもよくやったと思いますよ。住めば都なのです。津波さえなければ。海は近いし、空気はいいし、東北なのに雪は少ないし。

—— 大谷仮設歯科診療所は、1年後どうなるかわからないのですね。採算がとれないようであれば閉めざるを得ない日がくるかもしれないのでしょうか。

芳澤 仮設住宅に被災者たちがいる以上は、仮設診療所を続けるという考えはもっているけど。しかし、確実に患者さんは減っているんで、赤字になると難しい。月にどのくらい患者さんが通ってきているか、実人数というのがあります。大谷仮設歯科診療所は、月あたり120人前後です。採算が合うかどうかギリギリでしょう。歌津の診療所には月130人ほど、志津川の仮設歯科診療所が150人通っている。その人のために診療所を維持するか、廃止するかが大きな問題ですね。結局、自分の少ない老後資金を継ぎ込んでいく必要があるかですね。12月の決算で申告があるから、そこである程度わかるでしょう。今年は去年の補助金がきているから、それを除いて計算をしてね。今年はそんなにひどくはないと思うけど、問題は来年ですよ。患者がもっと減ったら辞めざるを得ない。問題は政府がどう考えているかですね。参議院選挙があつて、国会議員は気仙沼には来ていないけれども、隣の佐沼歯科医師会の会合には来た。そのときも訴えたのだけど。この前も宮城県知事選があつたけれども、2年半過ぎていて自立しろ、と言われても。貯えのある人はどうとでもなる。貯えのない人、弱者、老人、子ども、そういう人たちを見捨てていいのか。気仙沼歯科医師会は合併しているから唐桑、志津川まで気仙沼歯科医師会になって総勢30人ほど。歯科医院は30軒弱です。大谷と三軒の仮設歯科診療所が辞めたら…。震災で4軒廃院しているし。うち2人は津波で亡くなっている。我々が辞めたら歯医者が必要なくなるね。歯科医師会には、実際は仕事してない高齢の先生もいるわけで、将来的に歯医者が必要なくなるね。

■苦痛と悲しみは忘れるようにできている

—— 気仙沼のある地区だと、人口の8割ぐらい戻ってこないのではないかと、といった話もあります。

芳澤 人口がどのくらい減っているかわかりません。住所を移さず、気仙沼で生活していない人も多いから、市も把握できていないでしょう。復興住宅もまだ全然建ってない。平成27年に完成予定だけど、定地の整地すらまだ済んでいない。資材が足りないとか、工員が足り

ないとか言っていますしね。地元の人も信用していないでしょう。

—— 仮設住宅に住まわれている方もまだおられますよね。

芳澤 何人か土地を買って、家を建てて退去した人はいるけども、まだ仮設住宅にいる人は多い。診療所の海側は災害危険地域に指定され、住宅はつくれない。自宅があった仮設歯科診療所の土地も指定を受けています。商店とか飲食店とかはいいけども、住宅用地としては建築許可がおりない。山がちな土地だから、平らなところがそもそも少ない。山側の住宅建築予定地となっている土地は、前より高くなっているね。今度海側の浸水した土地を政府が買収する、という話がある。評価額が下がっているからね。田舎ですから。特に大谷はお客さんが来ないですから、その土地も商業用地として活用されることはないでしょう。漁業関係の施設になるのか。その前に人がいなければね。

—— そうなると、先を考えて土地を離れる人もいるかもしれないと思いますか。

芳澤 いやそれはいいですよ。みんな故郷が好きですから。地元でできるのであれば再建したい、という人が多いですよ。

2年半過ぎると、環境も変わってきているし、津波の怖さが薄れてくるのだね。忘れていくことを止めるのは無理だから。これは私の見解だけれども、人間の苦痛とか悲しみは薄れていく。忘れるようにできている。忘れないと生きていけない。個人差はあるのだろうけど、私も生活していて思い出す回数は減った。それでもテレビを見ていて、地震時の津波の映像を映し出すと、急に感情的になることが今でもある。一瞬だけれどもね。涙がでそうになるときがあるよ。地震の怖さを実際に見ているから。チャンネルは変えちゃうね。あんまり見たくないとか。それでも少しずつ忘れてきているわけだね。これから自分の老後を考えつつやっつけてかないとね。これか先のことをね。幸いこういういいところに住めた。いろんなことが安定しつつあるのかな、と思うけどね。

2013年11月2日

埼玉県大宮市 ご自宅にて

聞き手・石川達哉、紙谷尚